

環境省と気象庁が関東甲信地方で7月から試行している熱中症警戒アラートは、県内にこれまで計20日発表され、対象地域の1都8県で最多となっている。熱中症の症状で病院に運ばれる人は、アラートが相次いで出された8月に急増。暑さ

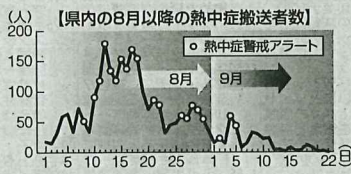
の和らいだ9月中旬以降は発表されていないが、湿度が高いときは汗が蒸発しにくく熱中症になりやすいとされ、引き続き注意と対策が求められている。

(渡辺 渉)

= 関連記事1面に

アラート 神奈川最多

熱中症警戒で試行



搬送者数は8月に急増
高湿度沿岸にリスクか

発表日	発表日	発表日
神奈川 20日	栃木 12日	12日
千葉 18日	埼玉 11日	11日
東京 17日	山梨 10日	10日
茨城 15日	長野 5日	5日
群馬 14日		(25日現在)

【県内の8月以降の熱中症搬送者数】
熱中症警戒アラート

低い三浦や辻堂で暑さ指数がアラート発表基準の33以上と予想されたケースが多く、回数を押し上げる形となった。当初、県内には10〜15日間は暑さ指数を想定していた気象庁は「記録的な暑さとなったため、発表回数が増えた」としている。

アラートの発表基準に湿度などが考慮されているのは、気温のみを指標とするより、熱中症搬送者数との相関が高く、リスクの実態を反映できると考えられているからだ。

実際、県内でアラートが発表された日は搬送者数が増える傾向となっており、ほぼ同水準となっている。

8月11日から18日にかけては連日100人以上が病院に運ばれ、最多は12日の179人だった。県などによると、同日は自宅の庭先で熱中症となった大和市の男性(83)が死亡し、11日も小田原市の男性(73)が自宅の居室内で熱中症になり亡くなっている。

総務省消防庁の集計では、6月1日から9月20日までに熱中症の症状で病院に運ばれた人は全国で6万3537人(速報値)、県内は3260人(同)。梅雨明けが遅れ、気温の低い日が続いた7月から一転して8月に大きく伸び、昨夏の全国展開につながる方針だ。

アラートによる警戒が県内で初めて呼び掛けられたのは、8月8日。その後、10〜18日の9日間連続で発表され、8月下旬や9月上旬にも相次いだ。25日現在で発表日数が神奈川に次いで多いのは千葉(18日)で、東京(17日)、茨城(15日)が続く。最高気温35度以上の猛暑日が多かった埼玉や群馬より、海沿いの地域で発表日数が多い傾向となっている。

県内でも、気温が比較的に低い三浦や辻堂で暑さ指数がアラート発表基準の33以上と予想されたケースが多く、回数を押し上げる形となった。当初、県内には10〜15日間は暑さ指数を想定していた気象庁は「記録的な暑さとなったため、発表回数が増えた」としている。

アラートの発表基準に湿度などが考慮されているのは、気温のみを指標とするより、熱中症搬送者数との相関が高く、リスクの実態を反映できると考えられているからだ。

実際、県内でアラートが発表された日は搬送者数が増える傾向となっており、ほぼ同水準となっている。

従来、高温注意情報に代わる情報として始まった熱中症警戒アラートは、10月下旬まで1都8県で試行される。気象庁などはインターネットや自治体へのヒアリングを活用してアラートの認知度や活用状況を課題などを探り、来夏の全国展開につながる方針だ。

アラートによる警戒が県内で初めて呼び掛けられたのは、8月8日。その後、10〜18日の9日間連続で発表され、8月下旬や9月上旬にも相次いだ。25日現在で発表日数が神奈川に次いで多いのは千葉(18日)で、東京(17日)、茨城(15日)が続く。最高気温35度以上の猛暑日が多かった埼玉や群馬より、海沿いの地域で発表日数が多い傾向となっている。

県内では9月に入り、4日に搬送者が60人となった以外は一日当たり50人以下で推移。中旬以降はほぼ1桁となっており、横浜の最高気温が25・9度だった22日に初めて搬送者がゼロとなった。

県消防保安課は「最高気温が30度に達しない日でも病院に運ばれる人が出ている。涼しい日が続いた後に気温が上昇すると、熱中症になる人が増える傾向がある」と注意喚起する。